杖の効用

大学病院、私立病院、国立病院などなど、病院と名の付くところはいつも患者でごった返している。こんな狭い地方の街に、こんなにも大勢の病人がいるものと感心するが私もまさしくその一人である。高齢者の象徴のような病気となり、リハビリという情けない身体機能の訓練のために、週に一度近所の某病院に通院しているのである。

一時間待って三分間の診療とはよく言われるが、それぞれの科の前で順番を待ってやっと診察が終わり、それから会計での支払い、これがまた各科から回ってきた大勢の患者が集まって、一段と混み合う場所なのである。外科、内科、小児科、整形外科、等々。何人もいる会計係りの人たちも書面を捌くのに大変な労力を要するのだろう。マイクで一段と声を張り上げては準備の整った人の名前を読み上げて混雑を緩和するべく努力をしているようだが、次々と湧き出るような患者に圧倒され、てきぱきと事がはこんでいるとはいえない。ことに十一時ごろの時間帯は混み方もはげしい。会計のカウンターの前にはかなりの数の椅子が並べられていて、そこに座って待つようになっているが、椅子の数が足りなくて、立って待っている人も多く見受けられる。今

日は私もその一人だ。席が空いたら直ぐに座ろうときょろきょろしながら空くのを待っている。

すると私が立っている場所から三、四人ぐらい前の席に座っていた人が名前を呼ばれて立ち上がった。しめた、これで座れるぞと内心ほっとしながら空いたばかりの席に近づいていった。そのときだ、　私の後ろのほうから杖が延びてきて空いている席をめがけてパシッと止まった。驚いて振り返ると、私の後方で何人かの人たちと一緒に立って待っていた老婦人が自分のつえをのばして、その先で、すばやく椅子を確保したのだ。当然私が先に座るべきはずなのに、椅子に近づいても彼女の杖が邪魔をして座ることができない。杖の持ち主は後の方から悠々と近づき、私の傍を通り越してきて椅子に座った。）

私と同年輩とおぼしき彼女の顔をじろじろと見つめた。見つめられるぐらいのことで動ずる人ならこんなことはしないだろう。何事も無かったように私を完全無視して、一瞥も投げかけることはなかった。私はまだまだ未熟だ。彼女のように有効に使うことの出来なかった自分の杖を恨めしくながめた。

（二〇一二年九月）

（２０１７年の現在、会計の組織は大幅に変わってもう待つことはなくなった）